



Contents

- LoFR オープンレクチャー「著作権法改正 — デジタル社会の図書館を考える」
- 研究所 TOPICS
- 地域の記録を未来に残す — 山本作兵衛と永末十四雄
- Library Compass — 図書館探訪：「学校7」という名の公共図書館
- 2022 年度の主催イベント予定



近日開催 未来の図書館 研究所 オープンレクチャー (LoFR Open Lecture) のご案内

著作権法改正 — デジタル社会の図書館を考える



令和3年著作権法改正を受け、国立国会図書館の「個人向けデジタル化資料送信サービス」が今年5月に開始になり、来年度からは公共図書館等でも資料の複製物をメール等で送信する「図書館等公衆送信サービス」が始まります。

第1部では、著作権法改正の意義と課題について、第2部では、公衆送信サービスの実務に必要なことから確認しつつ、これからの図書館サービスへの期待や懸念点についてお話しいただきます。

【第1部】未来の図書館と著作権法のあり方の検討に向けて

講師 **村井 麻衣子** 氏
筑波大学図書館情報メディア系准教授

【第2部】図書館資料デジタル送信：図書館はどう対応するのか

講師 **岡部 幸祐** 氏
日本図書館協会常務理事兼総務部長

日時 2022年8月22日(月) 13:30 ~ 15:30

現在 YouTube ライブ配信のみ受付中
(限定公開、アーカイブ配信なし)

参加方法 Web 会議サービス (Zoom) によるオンライン開催とし、同時に YouTube でのライブ配信を行います

申込方法 申込フォーム <https://www.miraitosyokan.jp/future_lib/lecture/202208/>

または右の QR コードからお申込みください。参加申込受付は当日 11:00 まで。

※ 当初は Zoom のみでの開催予定でしたが、多数のお申込みをいただき定員に達したため、

YouTube でのライブ配信を行うことにいたしました。現在は YouTube ライブ配信のみ申込受付中です



参加費
無料



『図書館とポスト真実(未来の図書館 研究所 調査・研究レポート2021)』

上記オープンレクチャーでご講演いただく村井麻衣子氏による「未来の図書館と著作権法のあり方の検討に向けて」を掲載しています。お求めは、右記 QR コードの樹村房 Web サイト<https://www.jusonbo.co.jp/books/276_index_detail.php>から、またはオンライン書店やお近くの書店でご注文ください。

書籍のご購入はこちらから!



研究所 TOPICS

■ 国立国会図書館『デジタル資料の長期保存に関する国内機関実態調査報告書』が公開されました

同調査報告書は、当研究所が 2021 年度に受託した調査結果を基に、国立国会図書館が作成したものです。国内の図書館・博物館・美術館・公文書館等(回答機関数 2,921)のデジタル資料の収集・保存・提供の状況や課題等がまとめられています。▶ <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/12300247>

地域の記録を未来に残す — 山本作兵衛と永末十四雄

いそべ
磯部 ゆき江

今年の2月11日から3月13日まで、東京富士美術館で「山本作兵衛展」¹⁾が開催された。ユネスコ「世界の記憶」²⁾登録10周年を記念したものである。当研究所の第1回シンポジウム「図書館のゆくえ—今をとらえ、未来につなげる」で渡部幹雄氏が講演の最後に山本作兵衛と永末十四雄について紹介しているので、覚えておられる方もあろうと思う。ここでは、一般的にはあまり知られていない永末の側から二人の関係と業績のアウトラインをたどり、失われていく地域の資料を収集・発信することが、地域の文化を未来に伝える図書館の重要な役割であることを確認することとしたい。地域の記録や住民の体験を伝える図書館の地域資料収集・提供の活動が、世界的な歴史記録につながることを二人の業績が示しているからである。

◆山本作兵衛の生い立ちと仕事

山本作兵衛は1892年福岡県嘉麻郡笠松村(現・飯塚市)に生まれた。遠賀川の川舟船頭であった父が、開通した鉄道に石炭輸送が移ったため炭坑夫となり、一家で炭坑集落に移住した。家計を助けながら小学校に通う。生来絵を描くのが好きで一時はペンキ屋に弟子入りしたこともあったが、父の病気でやむなく炭坑に戻る。以後、炭坑を転々としながら約50年の坑夫生活を送った。石炭産業はしだいに衰退し、炭坑も閉山、彼も解雇されて、長尾鉦業所の夜警宿直員となった。孫たちに消えゆくヤマの生活や作業を描き残しておこうと仕事の合間に画用紙に墨絵を描いた。その炭坑画が見る人の感動を誘い、また会長長尾達生の知るところとなり、長尾ら中小鉦主仲間による刊行会から『明治・大正炭坑絵巻』として出版された。

山本作兵衛は、後に刊行された『画文集 炭鉦(やま)に生きる一地の底の人生記録』³⁾で過酷な炭鉦の労働とそこに生きる人々の暮らしを文章で克明に綴っている。炭鉦労働者は世間から賤しいとされ、炭鉦集落は町から隔離されていた。鉦夫たちを就労だけでなく生活全般にわたり中間搾取し暴力で威圧する納屋制度があった。賃金は炭鉦内や出入業者にしか通じない「切符」で支給し現金を持たせず、逃亡を防ぐよう行動を拘束したという。坑内での落盤などの災害で死ぬ者も多く、堪えるに堪えきれず、逃げるに逃げきれず、坑内での悲惨な自殺を山本作兵衛は目撃した。同書の解説で永末が、山本作兵衛について次の言葉を贈っている。「山本さんのように五十年以上も炭鉦労働者として働いて、生き抜いたことだけでも偉とするに足りることなのである。その上記録を残し、その記録がはなはだユニークな形式と内容を備えていることは、ただ奇跡というより他はない。」

◆永末十四雄の生い立ちと仕事

一方、永末十四雄(本名は十四生)は、1925年福岡県田川郡後藤寺町(現・田川市)に生まれた。県立修猷館中学(旧制)卒業。軍隊では兵站輸送を行う歩兵として苦汁をなめた。戦後家業の炭鉦購買店を手伝い、1950年田川市立図書館司書補となる。九州大学の図書館専門職講習会に派遣され司書資格を取得。1963年に館長職務執行、1967年館長に任命された。



謝辞:「山本作兵衛展」ポスター画像の掲載を許諾いただいた東京富士美術館および作兵衛(作たん)事務所に感謝申し上げます。
なお、文中敬称は略したこと、またそれぞれの参考文献に上げたため「炭鉦」「炭坑」および「鉦夫」「坑夫」の表記が混在することをお断りします。

田川市立図書館は1948年に開館し、1968年には小冊子『20年のあゆみ』⁴⁾を刊行している。永末はそのあとがきで「過去20年のうち本市が比較的安穏であったのは、ほんの一時期にすぎず、長い期間炭鉦合理化に伴うきびしい状況が続いています。当然本館の運営には、他市にみられない困難さがつきまとい、その足跡はかなりの起伏を免れておりません」と述べているが、そのような困難な状況でも、図書館はさまざまな活動を行っていた。図書館年表⁵⁾を見ると、図書館が継続的に田川郷土研究会の活動を支援していたことがうかがわれる。1954年の発足とほぼ同時に創刊された機関誌『郷土田川』には、図書館が出版の助成も行っていた。古記録、行政記録、新聞、写真・絵画など、地域に関するあらゆる資料を体系的に収集しようとする永末の図書館人としての意識が、広く人々に協力を求めながらも学んでいく市民研究者の組織づくりにもつながっていたのであろう。そして1964年に田川郷土研究会と連携し「炭鉦資料収集運動」を展開する。

筑豊地域社会史に関する永末の著作としては『筑豊—石炭の文化史』(日本放送出版協会1973年)、『筑豊讃歌』(日本放送出版協会1977年)、そして晩年の『筑豊万華—炭鉦の社会史』(三一書房1996年)が挙げられる。それらは崩壊した石炭鉦業と不可分だった郷土への痛切な思いと筑豊に身を置く歴史研究者として問題の核心を客観的に問い続けた所産といえる。その源となったのは、新聞・雑誌記事を総合的に整理・分析する作業や関係資料の収集に従事したこと、最前の一般市民がメンバーである田川郷土研究会である。

永末の業績には、図書館学、特にわが国の公共図書館史研究(主著は『日本公共図書館の形成』⁶⁾)と生涯を過ごした田川の郷土史や筑豊の石炭産業・炭鉦社会史の二つの領域がある。共通するのは、豊富な文献を徹底的に使いこなし、公共図書館とは何か、筑豊社会とは何かという本質を突く構造的問題を歴史研究のなかで追求したことである。

◆炭鉱資料収集運動で見出した作兵衛画の資料的価値

図書館活動と炭鉱文化史研究が結節した重要な事業が前述の「炭鉱資料収集運動」であった。相次ぐ炭鉱の閉山、石炭産業が崩壊していくなかで行われた。キャンペーンを張り新聞にも大々的に報道してもらったという。各方面から資料が寄せられたものの、永末が求める炭坑全体の生活、全体の仕事を伝える資料がなく、あっても秘匿されていて手が届かなかったという。そのとき思い出したのが山本作兵衛の絵だった。非売品として出版された『明治・大正炭坑絵巻』には永末も編集に関わっていた。1968年に福岡文化会館で田川市立図書館所蔵の作兵衛作品が「明治・大正炭坑絵巻展」として公開された際の記念講演で永末は次のように話している。「何とかあの絵を資料集収運動のためにもう一度描いていただいて、そして後世に残す。本当の炭坑資料の柱になる—これが炭坑だといえる資料として残させていただきたいという熱望を持ちまして、山本さんのところに私お願いにあがったわけでございます。」⁷⁾この願いに作兵衛は二つ返事で即座に承知したという。

永末はここで記録性をより高めるための依頼をする。「本当は色彩をお使いになったら、もっといい絵ができるのではなからうか。もっと広い紙ならもっと効果があるのではなからうか」と考え、保存性の高い岩絵具と全紙判ケント紙を提供するようにしたのである。それ以後作兵衛は彩色画を描くようになり制作に没頭した。驚くほどのペースで絵を完成させ図書館に寄贈を続けた。炭鉱資料収集運動開始翌年の1965年には早くも「山本作兵衛翁炭鉱画展」が開催されている。3年ほどの間に280枚もの絵が図書館に寄贈され続け、福岡文化会館での絵巻展に至った。展覧会は最初、東京でやりたいという話が出たが、絵を所蔵する田川市立図書館が、地元で展示した後でなければ他所へは出せないと断ったという⁸⁾。まず郷土の人々に見てもらいたいという永末の心意気だった。

◆作兵衛作品の魅力と豊かな記録性

作兵衛は大変記憶力が良く、その上膨大なメモ（「作兵衛ノート」）も残っていた。作兵衛の絵は夜警仕事の合間に描きためた墨絵のころから、絵と詞書が一体となった独自の様式で描かれている。色彩画となってからは、一人でも多くの人に見てもらおうという新たな目的をもって、記録性はさらに豊かになっていった。作兵衛自身が「ただひたすら正確にありのままを記すことのみを心掛け、それ以外のことは考える余裕もありませんでした」と述べている。むろん炭坑の中は真っ暗だから、はっきり見えるわけではない。体験と記憶をもとに一貫して正確に描いているのである。

彩色画にはプリミティブ・アートに通じる明瞭で素朴な魅力があると思う。特に衝撃を受けつつ目が離せなかったのが女性たちの労働だ。女坑夫は後山（アトヤマ）と呼ばれ、先山（サキヤマ）と一緒に働くことがほとんどだったという。アトヤマはサキヤマが掘った石炭を運搬することが主な仕事だった。這いつくばって背中に棒をのせて、前後のかごに石炭を入れて運ぶ。うつ伏せに近い形で前方にある石炭の入った函を押す、あるいは体に縄をかけて後ろの函を引く。一人でツルハシをふるっている絵もある。いずれの女性も上半身は裸で腰布一枚の姿だ。石炭まみれになっているはずだが、女性たちの肌は白く、着物の模様は鮮やかに描かれている。力強く美しい。

永末は「炭坑労働の記録についてはいろいろな本はありますがけれども、本当に働く者の立場から具体的に書かれたものは今

までなかった。これが山本さんによってはじめて具体的にしかも系統的にかかれた。単なる事実解説ではなくて一つの労働の記録として残されたことは、この絵が何ものにも代え難い一つの価値を生み出しているように思います。」と記念講演で述べている。炭坑画の記録的価値をいち早く認め、作兵衛を制作に向かわせたのは図書館人として地域資料収集にかける永末の情熱だったのであろう。作兵衛はあれこれ言われずとも永末の熱意を受け入れ理解して、夢中で描き続けて永末のところに届けたのだと想像する。

作兵衛作品は、その後永末らの働きかけもあり、評価を高め広く知られるようになっていく。テレビ番組でもたびたび取り上げられ、田川市文化功労者、福岡県教育文化功労者となり、作兵衛は1984年に92歳の生涯を終えた。1983年の田川市石炭資料館（現・田川市石炭・歴史博物館）の開館にともない、炭坑画は「作兵衛ノート」などの資料とともに図書館から資料館に移管された。永末は図書館を退職後、資料館の生みの親でありながら館長になることはなく、北九州市立図書館相談役、近畿大学九州短期大学教授をつとめ、1995年に70歳で逝去した。ユネスコ「世界の記憶」の登録は2011年だから、作兵衛没後27年、永末没後16年の時を経てからのことである。

◆デジタル時代に永末の業績を再評価する

田川郷土研究会は、経済史・産業史研究者と共同研究で『筑豊炭礦業史年表』を1973年に刊行しており、現在、田川市立図書館の「筑豊・田川デジタルアーカイブ」⁹⁾で読むことができる。最近、デジタルアーカイブに関する著作が出たり、雑誌や研究集会のテーマにもなって、地域資料の発掘・収集に目が向けられている。永末は「資料として図書館に保存されるというのではなくして、皆さま方のいろんな研究会あるいはその他の活動に活かされ、更に後の人にこの資料が一時代と一つの世界を具現した文化財として長く伝えられることを願う次第でございます」と利活用されることも望んでいた。デジタル化の時代であっても、一連の永末の業績は忘れ去られるのではなく、再評価に値すべきものであると思う。記録された文献とともに個々人の体験の蓄積が地域の記憶として歴史に残されていく。図書館が失われてゆく風景や記録、市民の体験などを価値ある地域の資産として後世に伝えることは重要な意味をもつのである。

<注・参考資料>

- 1) 山本作兵衛展 山本作兵衛コレクション ユネスコ「世界の遺産」登録 10周年記念。東京富士美術館、2022、134p.
- 2) 「世界の記憶」はユネスコが1992年に開始した事業で、人類史における重要な記録物（例えばアンネ・フランクの日記、マグナ・カルタなど）を国際的に登録する制度。登録の可否が審議される国際諮問委員会には、国際図書館連盟（IFLA）など、図書館やアーカイブに関係する国際機関が助言を行う。「世界の記憶」に日本で最初に登録されたのが、山本作兵衛の炭坑記録画・記録文書である（その後慶長遣欧使節関係資料、御堂関白記、東寺百合文書（いずれも国宝）等が登録されている）。
- 3) 山本作兵衛。画文集 炭鉱（やま）に生きる：地の底の人生記録。講談社、1978、214p.
- 4) 20年の歩み。田川市立図書館、1968、24p.
- 5) 前掲書、p4-14.
- 6) 日本図書館協会より1984年に刊行され、1986年度日本図書館学会賞を受賞した。
- 7) 永末十四生。絵巻に現われた炭坑の労働と生活。西日本文化。1968、第40号、p.4-13.
- 8) 前掲書、p1.
- 9) 筑豊石炭礦業史年表。筑豊・田川デジタルアーカイブ <https://trc-odeac.trc.co.jp/Html/Home/4020605100/topg/chronology.html> (参照 2022-07-25)

北ホラント半島の先端にあるデン・ヘルダーの公共図書館(写真1その前景)が、2017年にオランダのベスト・ライブラリに選ばれ、2018年にはIFLAのPublic Library of the Yearを授与された。これといった産業もない、海軍基地だけの小さな自治体のつくった図書館がなぜ選ばれたか。今回訪ね、プロジェクト・コーディネータのJacinta Krimpさんにいきさつを伺い、納得がいった。

キーワードとなるのは、サステナビリティ(持続可能性)のようだ。

第二次世界大戦中、この地域はもっとも激しかったといわれるロッテルダム以上にドイツによる爆撃を受けた。デン・ヘルダーには、昔の建築がほとんど存在しない。そのような状況で、たまたま残ったこの学校7の建物を地域の遺産として継承し、その骨組みを図書館に再利用することによって経費節減もできたという。写真2では、屋根や壁が閲覧室のなかに見られる。教室や玄関、トイレなど様々な部分を図書館の機能に埋め込み、人々の記憶を留めている。

また、図書館運営にあたっているのは、図書館法人* KopGroep**である。四つの自治体にまたがる図書館システム(18館)を管理していて、この「学校7」はその本館にあたる。有給雇用者は総勢63名、ただし、自治体の財政のなかで図書館が継続的にサービスを展開するため、ボランティア260人の協力を得ている。人々の集会だけでなく、結婚式などにも提供し、開放的な運営のもと、法人と自治体との関係は良好だという。

前景はわかり映えしないが、一步なかへ入ると、木材を多く使った内装とカラーリングにより落ち着いた佇まいで、家具デザインもとてもよい。デン・ヘルダーは、戦禍のあと長らく灰色の街であったが、近年緑も増えた。その街の光景を、書齋空間の窓にしている(写真3)。

住民みなが通った小学校の再利用による公共図書館が、人々の学びやくらしを支援し記憶を分かちコミュニティをつないでいる。(永田治樹)

* オランダの図書館法人については拙著『公共図書館を育てる』を参照

** <https://www.kopgroepbibliotheken.nl>



写真1 「学校7」の前景



写真2 校舎の外壁等を取り込んだ閲覧室



写真3 窓のある書齋空間

2022年度の主催イベント予定

■第6回ワークショップ「図書館員の未来準備」:10月~11月開催予定

今年も「図書館情報システム」とこれからの「図書館の役割」をテーマに開催します。各領域の講師は、次の方々を予定しています。詳細が確定しましたら、当研究所 Web サイト等でご案内いたします。

- ・領域「図書館情報システム」:中野良一氏(かんたん AI 教育ラボ)/星野雅英氏(元東京大学附属図書館)/川嶋斉氏(Code4Lib JAPAN/野田市立興風図書館)
- ・領域「図書館の役割1(図書館とコミュニティ)」:大串夏身氏(昭和女子大学名誉教授)/西口光夫氏・青木みどり氏(豊中市立図書館)
- ・領域「図書館の役割2(図書館と学び)」:中山美由紀氏(立教大学)/渡辺ゆうか氏(ファブラボ鎌倉/国際STEM学習協会)/江竜珠緒氏(明治大学付属明治高等学校・中学校)

■第7回シンポジウム「図書館とコミュニティアセット」:11月以降開催予定

今回は「図書館とコミュニティアセット(地域資産)」について考えます。国立歴史民俗博物館の後藤真氏と都城市立図書館の井上康志氏・藤山由香利氏をお招きする予定です。

